人とつむぎ、織りなす日々のなかで

高齢期の発達

第10回　老いてなお、自分にできることを

張 貞京

ちゃん　ちょんきょん／京都文教短期大学准教授。共著に『保育者のためのコミュニケーション・ワークブック』（ナカニシヤ出版）。

先月号のハシオさんは、自分らしい表現で他者とつながり、その想いと姿を周りからしっかりと受け止められて支えられ、最期まで自分らしく過ごすことができたと思います。農耕班である誇りをもち、農耕班で絵を描いていたハシオさんの姿から、働くことの意味をあらためて考えています。

今回は、身近な人の老いや死をとおして不安を抱きながらも、自分にできることを探し求め、悩み続けたかずえさんの生涯を振り返ってみたいと思います。66歳で亡くなるまで、かずえさんは他者と支え合うことを大切にし、大人としてしごとと暮らしの毎日に全力を注ぎました。

工房のマネージャー

かずえさんが大津のあざみ寮に10歳で入寮してから、しごとと暮らしの場でその成長と生き方をずっと見守り、指導してこられた石原繁野さんによれば、かずえさんは努力家、情熱家で、もみじ・あざみの織物工房一のアーティストであり、マネージャーなのだそうです。

私がはじめて出会った40代のかずえさんは、群れで泳ぐ鳥や動物を生き生きとした姿で描き、毛糸のむすび織や染め物で、色鮮やかに作り上げていました。むすび織をしているとき、黙々と集中しているのに、工房を訪れるお客さんには、誰よりも早く気づいて出迎えてくれます。どこから来たか、誰の知り合いか、季節や天気など話を進め、ほかの人が会話に加わると、すっと自分のしごとに戻ります。自分のしごとをしながらも時間を確認して、休憩時間に合わせてみんなのコップを用意し、お湯を沸かしたり、お客さんにコーヒーを渡したりします。しごとでも、染め物が乾くまでの時間に片づけをするといった具合ですから、立ちどまる時間がありません。かずえさんが立ちどまっているように見える時は、なにかの様子をじっと観察しているか、周りの話題に耳を傾けています。

暮らしの場で友だちや職員がとりくみ始めたことには、いち早く気づいて参加して、好きなことに熱中していきます。合唱クラブや社会科学習、手話、習字、お点前など、もみじ・あざみでとりくまれたほとんどの活動に参加します。夕方以降は、日記や手紙を書き、大好きな歌手（元祖御三家の一人）のコンサートに向けて、歌を聴きながらプレゼントの千羽鶴をせっせと折ります。

しごとも、暮らしも全力で自分のものにして楽しみ、みんなのために自分の時間を割くかずえさんの姿からは、働く大人としての誇りと喜びが伝わってきます。友だちや職員をとおして興味関心のきっかけを得て自分のものにしていったかずえさんは、一人では得られない気づきと拡がりを実感していたのだと思います。

選択して、努力して努力して

かずえさんの充実した毎日は、たゆむことのない日々の努力でつくられています。小柄で心臓に重い疾患があったかずえさんですが、33歳の時に受けた心臓の大手術を乗り越えて健康な毎日を送ることができるようになります。その後の30代後半のかずえさんについて、石原さんは次のように紹介しています。

「文字はいつのまにか自分で覚えました。数も十までが五、六年前までは数えられなかったのに、今は三十まで数えます。足し算、引き算は彼女の生活に必要がないので覚えようとしませんし、彼女の力では少し無理です。どんなことでもこちらから一方的に教えようとしても、それはだめな人なのです。自分の必要だと思うことだけを選択して、努力して努力して覚えていきます。自分に無理なことには、けっして手を出しません。そしていつも職員のすることを見て、自分の生活に必要なものだけを真似していきます。いつもかずえちゃんの目はキラキラしています」*

◀かずえさん。展覧会にて

文字を覚えたのは、大好きな歌手の名前もきっかけの一つであったそうで、毎日、出演するテレビ番組を見つけるため、新聞のテレビ欄をていねいに探していくことで、読める文字が増えていったといいます。数もむすび織に使う毛糸の本数を数えるため、文字を書くのも好きなこと、大切なことを書く手紙や日記をとおして覚えていったようです。

身近な人の老いと死

かずえさんが書く手紙や日記には、さまざまな想いやねがいが溢れています。亡くなった後、ご家族より託されたかずえさんの日記には、老いと死が身近になった友だちや家族へ